

図書館だより

目次

書庫にて	1
「コロナで世界はどう変わるか？」 考えるための教員推薦図書	2～3
インフォメーション	4

書庫にて

青柳 隆志（人文学部長・日本伝統文化学科長 教授）



国文学という学問は、どれほど幅広く物を読んでいるかで決まるようなところがある。引き出しの数が、学会発表のような肝心なところで勝負を決める。自分がかつて、「書痴」といえるほどの本好きで、岩波文庫をどれだけ集められるかを目標にしていた奇矯な高校生であった。実際に1000冊以上は集めたが、昭和2年の初版から順番に並べて悦に入るといったたぐいの、収集家の域を出るものではなかったが、その背表紙を頭に刻み込むことで自分なりの「文学史」ができていた。しかし、自分が本当に「引き出し」を培ったのは、大学図書館の書庫においてであった。

開架の書棚を端から端まで眺めるのは、それはそれで楽しいが、閉架の書庫には、そうした陽の当たる場所での一軍を退いた、いわば「ベテラン」の書物がひっそりと息づいている。そこで、埋もれた本を探すのが、教育学部の大学生となった私の日課であった。「古典文庫」「貴重図書影本刊行会のコロタイプ版」等々・背表紙の色までまざまざと思い起こされる。古書店で見るそれらとはとんでもなく高価で、自分で手に入れることは叶わなかったが、ある日、一冊の本が目にとまった。

『新撰万葉集と研究』（未刊国文資料）というその本は、当時まだ注釈のなかった『新撰万葉集』の研究書で、私はたちまちその本にとりつかれた。巻末を見るとまだ誰も借りたことはないようだ。薄暗い書庫で、ひぐらし、茶色くシミの出た酸性紙の紙面を眺めていた。閉館時間の少し前になると、書庫からは追い出される仕組みになっており、翌日も演習の調べ物の合間に、書庫にこもることが続いた。

『新撰万葉集』は、『万葉集』の形態を借りながら、和歌一首を漢詩に翻訳する、という大胆な試みを行った歌集で、『古今和歌集』の成立と密接に関係がある。この本に夢中になった私は、当時考えられる限り全ての研究文献を集め、さらに自分で注釈をつけ、のちにその一部を『東京成徳国文』（短期大学国文科）に掲載した。

ついで、同書の数少ない研究者の方々に親炙して、修士課程時代に、全国学会での発表も行うことにもなった。

その方々の何人かは、やがて博士課程の先輩となり、お導きをいただくことになる。

大学の卒業論文『新撰万葉集の編輯意識』は資料を含めて800枚、修士論文『新撰万葉集の和歌配列』は400枚を超え、万年筆数十本を駄目にしたほどである。その時のペン牝肌がすっかりなくなってしまって、寂しいことの上ない。手書きの時代で、数を書けばいいというものではないと思うが、『新撰万葉集』という不思議な作品の正体を知るための、懸命な努力であったと思っている。その時のプロセスが、持著『日本朗詠史 研究篇』『日本朗詠史 年表篇』（笠間書院）となって結実することになった。

人との出会いが人生を変えるように、本との出会いも人生を変えうる。図書館はそうした出会いの場であり、あらゆる本を自分で購うことはできない以上、普通の人生では出会えないような本に出会うことができる、貴重な機会である。今にして思えば、この出会いがなかったならば、今日この場にはいなかったと思うと、感慨も一入である。

『新撰万葉集』には妙なジンクスがあり、専門研究者がいずれこの集から離れていくというところがある。それもまた人生に似ているといえなくもない。私もいつしか、『和漢朗詠集』の研究に移り、現在では、和歌のうたわれ方（披講）の研究を行っている。しかし、人との出会いがそうであるように、かつて『新撰万葉集』と格闘した日々が、自分の中から消え去ることはない。マイナーな作品の中にこそ、メジャーな作品に立ち向かえる要素があることを教えてくれた、紺色に金字の背表紙を今も忘れえぬのである。

東京成徳大学の図書館・分館にも、「書庫」はある。現在は倉庫のようになり、利用しにくい状態のようだが、心ある人は、どのような図書館であれ、「書庫」の立ち入りができるなら、そこに入ってみることを強くお勧めする。そこには、どんな不思議があるか知れませんぞ。



「コロナで世界はどう変わるか？」考えるための教員推薦図書



2020年度前期は、新型コロナウイルス感染症拡大により大学でも授業がすべて遠隔授業になるなど、誰もが予想もしなかった事態を経験しました。ビジネスの分野でもオンライン化が進み、大きな変化がこれからも進んでいくと考えられます。

今号では、コロナで世界がどう変わっていくのか、考えるために有用な図書を専門の教員が紹介していきます。これらの本は図書館にもありますので、是非手に取って、借りて、読んでみてください。

応用心理学部 臨床心理学科 学科長 一谷 幸男 教授 推薦



『パンデミックを生き抜く：中世ペストに学ぶ新型コロナ対策』（朝日新書）

本年4月から臨床心理学科に着任しました。専門は生理心理学、実験心理学で「神経・生理心理学」等を担当します。今年に入ってからの新型コロナウイルス感染症拡大は、日本でも緊急事態宣言にまで至りました。8月現在では第2波ともいえる全国的な広がりを示し、収束の見通しが立ちません。1年前には予測できなかったことであり、それゆえ世界中がどう対処すべきか苦慮している状況とはいえ、パンデミック（世界的大流行）や感染症の流行は人類の歴史の中では幾度か経験してきたことです。

とくに今回の感染で切実に感じるのは、同じ大流行といえどもその伝播の速さが過去のものとは比べて飛躍的であり、ほんの数週間で世界各地へ拡大していったことです。改めてグローバル化とはそういうことでもあるのだと、認識しました。グローバル化により、我々はこれまでは考えられなかったような膨大な情報を瞬時に、世界のどこにいても入手できるようになり、世界各地の相手とやりとりし、それが当たり前ようになってきたが、その便利さを享受する一方で、弊害やマイナスの側面を十分に知り、それに備える生活を求められるのでしょうか。

濱田篤郎著「パンデミックを生き抜く：中世ペストに学ぶ新型コロナ対策」（朝日新聞出版 2020年）には、14世紀にヨーロッパや中東で起きたペストの流行について、人類が滅亡の危機に瀕したといってもいいこと、それでも人類がそれを乗り切ってきたことが記されています。微生物の知識がはるかに進歩した現在においても、ワクチンのない状況で我々が感染症に立ち向かう方策は、ほとんど変わっていないといえます。ペストの流行で起こったことを知っておくことが今後の感染症を克服する上で役立つと考えて執筆していた矢先に、今回の新型ウィルスの感染が広がったというのです。

病原体の感染力と毒性（病原性）は反比例するので、「感染力が強い病原体は毒性が弱く、毒性が強い病原体は感染力が弱い。なぜなら、病原体は・・・どちらも強いと宿主（つまりは人間）が死に絶えてしまい、自分の子孫が残せなくなるから」という著者の解説にあるとおり、今回の感染はおそらく第2、第3の波を繰り返しつつ、いつかは終息の方向へ向かうでしょう。しかし、新たな未知のウィルスが流行する可能性は今後も続くとしか思えません。

コロナ後の世界をどう生きるかについて、次々と提言が出版されています。それらを読んで感じるのは、現在のコロナ感染の問題は、地球の温暖化や生態系の破壊による野生動物の絶滅と大いに関連があることを意識すべきだということです。温暖化によって新たなウィルスに感染する機会が増えること、自然環境を破壊して生き物たちの世界に人間が踏み込んでしまい、野生動物が持っているウィルスに接する機会が増えることです。

コロナとの闘いは、むしろコロナとの共存を人類がどのように成し遂げていくか、の問題と考えた方がよさそうです。本来、人が集うことによって行われる教育の場が、ウィルスによる挑戦を受けている危機的状況ともいえます。しかし、世界中を混乱させ不安に陥れているウィルスとの闘いは、流行の速度を遅らせつつ、経済や社会が破綻しないようにうまく付き合うしかないでしょう。その意味ではウィルスの撲滅というよりは、ウィルスとの共存・共生を探るべきという主張に共感しています。



請求記号：493.84/Ham
資料ID：901118790

経営学部 経営学科 武井 孝介 教授 推薦

『ポストコロナの経済学：8つの構造変化のなかで日本人はどう生きべきか？』

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、この春以降、私たちが慣れ親しんできた日常生活や経済活動はすっかり様変わりしてしまいました。友人や知人との「コミュニケーションの場」であった居酒屋やレストランなどの飲食店では、その多くが営業の自粛や時短営業を余儀なくされ、事業の継続と従業員の雇用をどう維持・確保するかという難しい問題に直面しています。一方、若者のエネルギーと笑顔に満ち溢れていた大学では、構内への入構制限とオンライン授業の実施によってキャンパス内はひっそりと静まり返る中、コロナ時代に対応した「新たな大学モデル」を早急に構築する必要に迫られています。

地震や風水害といった自然災害、あるいはバブルの崩壊やリーマンショックなどの経済危機と今回の「コロナショック」とが本質的に異なる点、それは社会や経済に及ぼすマイナス影響が一時的なものではなく、長期間にわたるのを覚悟しなければならないこと、それゆえコロナが収束した後も、以前のような社会には戻らない（戻れない）可能性が高いと考えられていることです。コロナをはじめ様々な感染症との「共存・共生」が世界共通の課題となる中、今後の社会や経済はどのような方向に向かうのか、どのように対処・対応していくべきなのか、本書はそうした私たちの問いかけに「ヒント」を与えてくれます。

民間シンクタンクのチーフエコノミストとして活躍している著者は、昨今の国内外における社会経済情勢と過去に起こった様々な事象や出来事とを比較・分析した上で、ポストコロナ時代に予想されるグローバルな構造変化として、「ステークホルダー資本主義」への転換、反グローバリズムや自国中心主義の台頭、グローバルサプライチェーンの再構築、財政赤字の深刻化、リモート社会の進展に伴う産業構造の激変、「分散型ネットワーク」への移行など、8つの項目を挙げています。そして今後、予想される社会や経済の構造変化に対して日本が的確に対応していくための「基本的考え方」や「具体的取り組み」として、世界へ向けて「SDGs（持続可能な開発目標）大国宣言」を行うことなどを提言しています。

私たちを取り巻く社会経済環境がコロナによって大きく変化する中で、今後も変わらない価値観、それは相互理解に基づく国家間や企業間、そして人間同士の「連携と協力」、そして「連帯」ではないでしょうか。そのために必要なことは、対面と遠隔とをうまく組み合わせながら、これまで以上に人々が積極的に「コミュニケーション」を取り合っていくことが大切になると考えられます。本書をきっかけに、皆さんも「新しい生活様式」に基づくこれからの社会経済について考えてみませんか。



請求記号：332.107/Kum
資料ID：901118651

『流行性感冒：「スペイン風邪」大流行の記録』（東洋文庫 778）



請求記号：080/Toy/778
資料 ID：901093966

コロナウイルス感染は、ヨーロッパでは、まず、北イタリアで爆発的な感染が起きました。ちょうどその頃、このイタリア北部にあるヴェネチア大学で開催される国際集會に参加する予定でした。しかし、組織委員会から集會中止のメールがあり、出発直前に航空機券とホテルの予約のキャンセルを余儀なくされました。

なぜ、北部イタリアで、コロナウイルス感染が広がったのか。イタリアの知人によると、たとえば、ファッション発信の地としても名高い北部最大の都市ミラノの場合、そこで働くお針子さんと靴皮をなめす職人は、中国籍の人が多いということで、それが関係しているのではないかとのことでした。

ヴェネチアは、フィレンツェやローマとならんで世界的な観光都市として知られています。インバウンドに頼る点では、日本の比ではありません。そこで、国際学部的視点からコロナ後、イタリアの観光都市はどうなるのか？ Amazonで「Destinazioni turistiche italiane dopo il coronavirus」と検索をしてみました。それらしい本があったのですが、今注文して読むとなると締切に…。

古くはダニエル・デフォーの『ペスト』（1722）、第二次大戦後のカミュの『ペスト』（1947）、また、未来学を提唱した小松左京の『復活の日』（1964）は、パンデミックを描いた傑作として、ここ最近多くのメディアに取り上げられています。これらの作品ではパンデミック後の世界も暗示されています。そのうちの一冊は、読んだ学生も多いかと思えます。しかし、おすすめは、今から100年ほど前にまとめられた『流行性感冒』（1922）です。

1918年-1921年にかけて世界は、後に「スペイン風邪」と呼ばれるインフルエンザウイルスのパンデミックを経験しました。その死者数は全世界で1億人にも達したともいわれています。当時の日本の人口は約5500万人、感染者は約2380万人、死者は約39万人です。このスペイン風邪大流行の日本での状況を今読んでも驚くほどの精密さで、政府機関の内務省衛生局が記録したのが『流行性感冒』です。

この書にはウイルス感染予防という章もあって、昨今なにかと話題の多い「マスク」の効果の部分には、「外科用ガーゼはマスクの材料としては不完全なり」とあります。

スペイン風邪流行後まもなく日本では関東大震災（1923）が起こります。さらに昭和期（1926～）に入ると日中戦争、太平洋戦争へと突入し、スペイン風邪よりももう一桁多い戦死者や一般市民の犠牲者を出していきます。

歴史は繰り返す。

スペイン風邪から、ちょうど100年後にあたるこの頃、After Corona… そんなことが起きないとよいのですが…。

『U理論：過去や偏見にとらわれず、本当に必要な「変化」を生み出す技術』
C・オットー・シャーマー 著 英治出版（第2版）



請求記号：336/Sch
資料 ID：901118748

本質を見つめ、出発せよ！

コロナ後、世界はどう変わるのだろうか。この本は、直接的な答えを与えてはくれない。しかしもっと大切な、答えに至る道筋を教えてください。

分厚い本だが、言っていることはシンプルだ。余計なものを捨て去り、深いところへ降りること。降りた底で、本当の自分を見つけること。本当の自分から、あるべき未来の姿は自然と立ち現れてくるということ。このプロセスをUの字にたとえ、U理論と命名した。しかし、われわれはこの考え方を既に知っている。そう、禅の考え方そのものだ。著者自身も、これは新しい発明ではなく、知に偏重した現代人が見失ったものを「目に見える形にしたかったのだ」という。

禅では、例えば座禅を通して余計なものを捨てる修行を行う。捨てて、捨てて、捨てきって、それでも残るもの。それこそが本当の自分なのだ。著者の場合、少年時代の火事が修行の代わりとなった。ハンブルク郊外、家族の歴史と自分の人生すべてが詰まった築350年の家を、目の前で炎が焼き尽くしていく。呆然と立ち尽くした次の瞬間、不思議なことが起こる。炎に飲まれた過去の自分とは違う、別の自分が現れたというのだ。物に執着せず、自由な自分。未来の自分。生きていている自分。つまり、本当の自分が。

この本は、人間の心、魂のメッセージを社会科学の言葉へと置き換えた「翻訳書」である。アリストテレスにはじまり、最新の経営学、心理学、認知科学などを駆使して、科学的に変化のプロセスを説明する。

本が、言葉以外による表現を言葉に翻訳するものだと、私はベアトリーヴェンを主人公のモデルとした小説で知った。読書後、それまで単なる音だった音楽が、強烈な言葉となった。

この本は、その時のことを思い起こさせる。人が知で、科学で理解できることは、全体のごく一部である。ただし、よい「翻訳書」に出会うことで、その範囲を広げることができる。この本の価値は、そこにある。

さて、コロナでわれわれは、半ば強制的にいろいろなものをあきらめた。しかし同時に、それまで絶対だと思っていたことも、手放してみたら意外とそうでもないことに気づいたはずである。変わるのは怖い。怖いから、現在にしがみついたり、過去を美化したりする。しかし、そこに未来はない。未来が、コロナ後の世界がよりよいものになるかは、本書が明らかにしたように、そしてわれわれが気づかずとも既に「知って」いたように、とらわれから離れ、本質に到達し、そこから未来の姿を描くことができるかにかかっている。

コロナ禍について考えるために、図書館には他にもこんな本があります

コロナ後の世界を生きる：私たちの提言 / 村上陽一郎 編 (岩波新書)
請求記号：304/Mur 資料 ID：901118690

コロナの時代の僕ら / パオロ・ジョルダノー 著 早川書房
請求記号：974/Gio 資料 ID：901118754

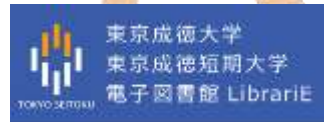
コロナ後の世界を語る：現代の知性たちの視線 / 養老孟司[ほか] 著 (朝日新書)
請求記号： 資料 ID：

感染症の世界史 / 石弘之 著 (角川ソフィア文庫)
請求記号：493.8/Ish 資料 ID：901118735

Information

電子図書館 Librari E (ライブラリエ) をご利用ください！

今年度7月より、電子図書館サービス LibrariE がご利用できるようになりました。インターネットの環境が整っていれば、いつでもどこでも、スマートフォン・タブレット・パソコンから小説・就職活動本・ガイドブック・料理レシピなど様々なジャンルの電子書籍を読むことができます。以下のURLにアクセスするか、本学図書館ホームページから右のバナーをクリックしてください。



<https://www.d-library.jp/tsu/>

「ネットで借りて、ネットで返す」電子図書館 LibrariE を是非お気軽にご利用ください。

【利用方法】

- * Office365 のメールアドレス (学籍番号@tsu.ac.jp/学籍番号@tsc.ac.jp) にお送りした ID とパスワードを使ってログインをしてください。ご不明な方は図書館までお問い合わせください。
- * 電子書籍の「借りる」ボタンで、14日間、5冊まで利用することができます。延長も1回まで可能です。
- * 他の利用者が貸出中の電子書籍は、「予約」ボタンで5冊まで予約しておくことができます。取り置き期間は3日間です。
- * 貸出せずに「試し読み」ボタンで最初の数ページを確認することもできます。
- * 貸出期限になると自動的に返却されます。期限より前に返却する場合は「マイページ」から「返す」ボタンを押します。

2019年度図書館長賞受賞者発表！



翠樟会（大学後援会）活動の一環として、図書館の活用度が高く、学修等を中心において他の学生の模範となるような学生を表彰するために、昨年度より「Best Student Award 図書館長賞」が創設され、学部生・大学院生の全学年の中から、図書館の貸出冊数が多く、かつ学力や教養等の向上に努めたと認められる以下の学生が、各学科から1名ずつ選出されました。受賞された皆さん、おめでとうございます。

2019年度 受賞者一覧

所属学部学科	学年（受賞時）	氏名	所属キャンパス	
人文学部	日本伝統文化学科	4年（3年）	桑野 峻輔 さん	八千代キャンパス
	国際言語文化学科	4年（3年）	ヘラット・ムディヤンセラゲ・スムドウ・ワットサラ・ヘラット さん	八千代キャンパス
国際学部	国際学科	該当者なし		
応用心理学部	福祉心理学科	4年（3年）	根本 佳苗 さん	八千代キャンパス
	臨床心理学科	4年（3年）	川村 朋輝 さん	十条台キャンパス
	健康・スポーツ心理学科	2年（1年）	高橋 和奏 さん	八千代キャンパス
子ども学部	子ども学科	卒業（4年）	政木 遥南 さん	十条台キャンパス
経営学部	経営学科	4年（3年）	板東 孝和 さん	十条台キャンパス
大学院	心理学研究科	修了（修士2年）	上村 依子 さん	十条台キャンパス

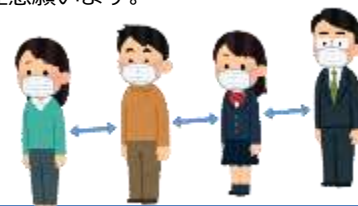
※ 翠樟会活動の一環のため、現在のところ短期大学生は対象外となっております。

図書館のご利用について

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、状況により開館スケジュールや利用方法は随時変更されております。ご利用に際しては、図書館ホームページ掲載の開館カレンダー及びお知らせをご確認いただき、ご不明な点がございましたら、図書館までお問い合わせください。なお、来館に際しては、感染防止対策として以下の点にご注意願います。

- * 咳、発熱、倦怠感などの風邪のような症状のある方は来館をお控えください。
- * 必ずマスクを着用し、入口設置の消毒用アルコールでの手指消毒をお願いいたします。
- * 館内では会話をご遠慮いただき、他の利用者と距離を確保するようにしてください。

長期にわたりご不便をおかけしておりますが、ご理解のほどお願いいたします。



東京成徳大学・東京成徳短期大学図書館
(十条台キャンパス)

〒114-0033 東京都北区十条台1-7-13
Tel:03-3908-3529
Fax:03-3908-4549

<https://tokyoseitoku-opac.limedio.ricoh.co.jp/drupal/>